

資料紹介

エドワード・モース著『日本陶器モース・コレクション目録』

小川 知幸

エドワード・モース著『日本陶器モース・コレクション目録』ケンブリッジ, 1901年刊

Edward S. Morse, *Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery*, Cambridge, Printed at the Riverside Press, 1901, xiii, 384, 40, xxviii p., leaves of plates; 30 cm. (芹澤文庫 G/438, 資料番号 00090149955)

本書は、大森貝塚の発見で知られるエドワード・シルベスター・モース(Edward Sylvester Morse, 1838-1925)が日本滞在中に収集した日本の陶器・磁器コレクションの目録である。

幼いころより貝に興味をもったモースは、1859年、21歳のときハーバード大学の海洋学者ルイ・アガシー教授(Jean Louis Rodolphe Agassiz, 1807-1873)の助手となったが、やがて進化論に傾倒し(ダーウィン『種の起源』1859年刊)、これに反対するアガシーと疎遠になっていった。

その後、動物学者ジェフリーズ・ワイマン(Jeffries Wyman, 1814-1874)の貝塚発掘などに協力したことから、当時、二枚貝の一種と考えられていた腕足動物を対象として研究にはげみ、その種類の多くが生息すると聞いた日本に、1877(明治10)年6月、私費で最初の来日をはたした。

4カ月半足らずの滞在であったが、その間に大森貝塚を発見し、また、請われて東京帝国大学で動物学や進化論などの講義をした。したがって進化論をはじめ体系的に日本に紹介したのは、モースであった。

翌1878年4月に、妻子をともなって再来日し、1879年9月まで1年あまりの滞在中に、北は小樽から南は鹿児島まで、精力的に各地を旅行して日本人の生活風俗を観察した。その記録を後年、*Japan Day by Day*, Boston, 1917(邦訳は、『日本その日その日』東洋文庫など)としてまとめて、出版している。

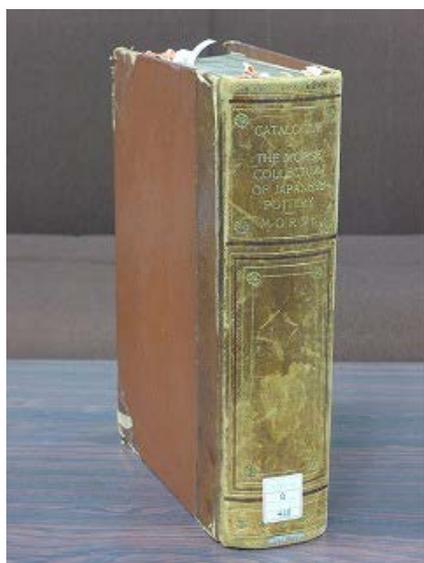


写真1:『日本陶器モース・コレクション目録』

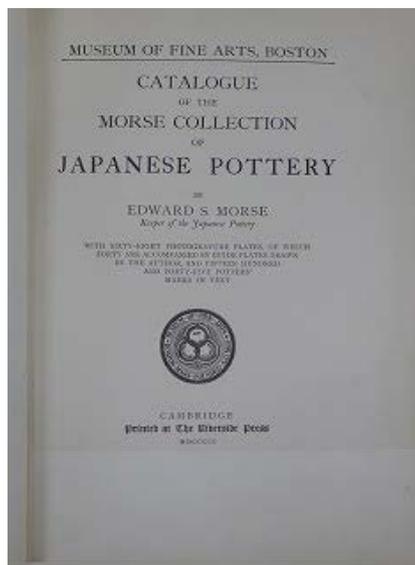


写真2:同書タイトルページ

3度目の来日は1882年6月で、医師であり日本美術の研究家であったウィリアム・ビゲロー(William Sturgis Bigelow, 1850-1926)が同行した。二人で陶磁器の収集にあげくれ、数千点を集めて母国に送った。そのコレクションの内容は、江戸期の各地古窯で作られた品じなであり、19世紀近世陶器のほとんどを網羅したのもといわれる。

1890年、モースはこれをボストン美術館に一括譲渡した。彼はこれを、「世界中にあるほかの日本陶器のコレクションを全部合わせたものより大きい」と自負していたという。評価額は10万ドルともいわれ、美術館は資金として7万6千ドルを集めたが、モースは

金額を6万ドルとしてあとは辞退した。その代わり、美術館は年額1千ドルを給与としてモースに日本陶器の管理を依頼し、以後、彼は週3日美術館で働いて、1901年にこのコレクションの目録を完成し出版した。それが本書である。モースは日本で翻訳され教科書のようにもちいられることを望んだという。

ところで、モースが日本の陶器に興味を転じたきっかけは、のちに伝記を出版したウェイマンによれば、2度目の来日時に、忙しさのあまり神経性の消化不良をおこしたことであったという(D・G・ウェイマン著・蜷川親正訳『エドワード・シルベスター・モース』中央公論美術出版、1976年)。



写真3:ボストン美術館のモース・コレクション(扉写真)

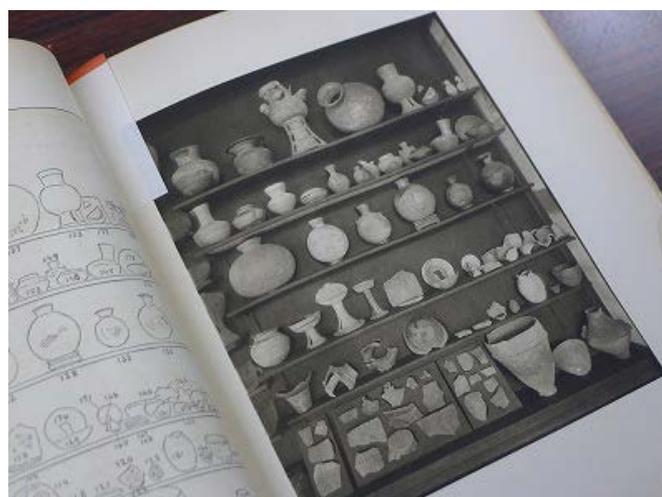


写真4:陳列ケースに収められた陶器のようす

医者から散歩を勧められ、散歩がてら通りの店先を覗いていると、ホタテガイにそっくりなかたちの皿を見つけた。にわかに関心をもって貝のかたちをした陶器類を探し、ある程度集めたところで友人たちに披露したとき、骨董でも何でもない安物だと言われ、発奮して古美術研究家の蜷川式胤(にながわのりたね)に弟子入りした。またたく間に日本陶器のエキスパートになったモースは、動物学者としての素養から、細部の特徴を見きわめる鑑識眼をもち、また、収集・分類・整理の能力に長けていたのだろう。

その力はコレクションにも反映された。彼は名品・逸品ばかりでなく日用品(いわゆる下手物)にも美しいものがある、という立場であった。本書の序論には、「陶器の用途」という見出しがある。そこには、台所、食器、暖房、照明、茶の湯、酒用、喫煙用、花瓶、携帯品、化粧盆、遊戯・玩具等々という項目が並んでおり、このコレクションの性格をよくあらわしている。

ボストン美術館におけるモース・コレクションの現在の点数は4,646点ということである。本書に掲載された陶磁器の写真はモノクロだが、インターネットのサイトをおとずれば、その一部をカラー写真で閲覧することが可能である。ちなみに、書誌的な観点からみて、本書の装丁は背革の紙装であるが、オリジナルではなく、いちど改装されたようである。しかしそのさいに、1903年に出版された小冊子の正誤表および補遺をあわせて綴じこんでいるのがユニークな点である。



写真5:大量の付箋が貼られている

さて、冒頭の書誌記述からもわかるように、本書が東北大学名誉教授で考古学者の芹澤長介(1919-2006)の旧蔵書であったことにも触れておきたい。芹澤は、1987年ころに福島県でおこなわれた学会で講演し、モースのコレクション目録を話題にしたという。おそらく、このときまでには本書を蔵書に加えていたのではないだろうか。

よく知られているように、福島県は、現存するものだけでも、相馬駒焼、大堀相馬焼、会津本郷焼、二本松万古焼、田島万古焼など、多種多様な陶磁器の産地である。たとえば会津本郷では、はじめ陶器が焼かれていたが、1800(寛政12)年に佐藤伊兵衛が磁器の焼成に成功したといわれている。しかし、明治以降の流通拡大のなかで「瀬戸もの」などが好まれるようになり、それまで営まれていた半農半陶のローカルな古窯は、急速に衰退していった。芹澤は、この日本陶器モース・コレクション目録から、古のやきものの跡をたどったのだろう。ちなみに、福島県でもっとも規模の大きかった大堀相馬焼の産地は、双葉郡浪江町であった。

芹澤自身も、1975年4月の宮城県加美郡宮崎町(現・加美町)切込における発掘調査によって、切込焼のかつての工房跡を発見している。古窯跡の発掘は、それまでほとんどおこなわれていなかったもので、こうしたものがいつときブームのようになったのは、芹澤以降のことである。芹澤は、切込焼には精製品と粗製品の二つがあるとして、精製品は、「伊万里の磁器と区別できぬほど白く上質」であったと記している。

生前の芹澤は、このように古窯の跡を探して歩き回ったり、あるいは、全国各地の古書店や骨董店にも足繁く通ったりしたという。そうして郷土の文献資料などを探し出し、歴史的な観点からも陶磁器類を観察していった。

発掘の現場からやきものが完形(完全なかたち)であられることはほとんどない。そのため、通常は断片から全体像や素性を想像するほかなく、そうしたことを可能とするには、あらゆるやきものの歴史を学び、その特徴を、五感をはたらかせて体得しなければな

らない。これが、芹澤がめざした考古学の実証法であった。

日本考古学の黎明期に大きな足跡を残したモースも、全国を巡り、街頭で熱心にスケッチをとり、各地でさまざまな陶磁器を買いもとめた。二人の先駆者の行動様式は、とてもよく似ていたといえよう。

参考文献

- ・『日本の陶磁展 ポストン美術館モースコレクション』東京新聞, 1980年
 - ・満岡忠成ほか編『日本やきもの集成』平凡社, 1981-1982年
 - ・小西四郎・岡秀行構成, 押切隆世写真取材『百年前の日本』小学館, 1983年
 - ・磯野直秀『モースその日その日』有隣堂, 1987年
 - ・太田雄三『E・S・モース 〈古き日本〉を伝えた親日科学者』リポート, 1988年
 - ・守屋毅編『共同研究 モースと日本』小学館, 1988年
- ※東北大学総合学術博物館・柳田俊雄教授に聞き取り調査をした。

(おがわ ともゆき, 学術資源研究公開センター・
総合学術博物館助教, 附属図書館協力研究員)